キャラクター名
行橋 小宵 (ゆくはし こよい)

プレイヤー名

シンドローム	ソラリス ソラリス	ワークス	中学生	カヴァー	中学生
オプショナル		年齢	15才	性別	女
覚醒	無知	衝動	恐怖	初期侵食率	32 %
出自		経験		邂逅	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	0	0	1			1
感覚	0	1	0			1
精神	2	0	0			2
社会	6	0	0			6

HP	24
行動値	4
(非装備時)	4
戦闘移動	9
全力移動	18

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	2		交渉		
回避			知覚	1		意志	1		調達		
運転：			芸術：			知識：			情報 :水祝町	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
1+3(80↑)	ＲＣ	2r+2				対象の次の行動のメジャーダイスを+6個、C値-1(下限6)
1+4	ＲＣ	2r+2				対象の次の行動のメジャーダイスを+4個、攻撃力+5
2+4+5(80↓)	ＲＣ	2r+2				範囲選択。対象の次の行動のメジャーダイスを+4個、攻撃力+5、HPを+3d+2回復
2+3+4+5(フル100↓)	ＲＣ	2r+2				範囲選択。対象の次の行動のメジャーダイスを+10個、攻撃力+5、C値-1(下限6)、HPを+3d+2回復

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
優しい奇跡	P	N		
家族	P 懐旧	N 不安		
友人	P 幸福感	N 隔意		
母親	P 慕情	N 不安		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 12	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
女王の降臨	2	5	セットアップ			自動	ピュア	
効果： メジャー・自動成功のエフェクトをひとつ使用できる。シナリオレベル回(2*3)								
ポイズンフォッグ	2	2	メジャー	至近	範囲選択			
効果： シナリオレベル回(2*3) 範囲選択に変更								
狂戦士	3	5	メジャー	視界	単体	自動	80↑	
効果： 対象の次の行動のC値-1(下限6)、判定ダイス＋レベル×2個(6*8)								
戦乙女の導き	4	2	メジャー	至近	単体	自動		
効果： 対象の次の行動のメジャーダイスを＋レベル個(4*5)、攻撃力に＋5								
癒しの水	3	2	メジャー	視界	-	自動		
効果： 対象のHPを(レベルd＋精神)点回復(3d+2*4d+2)								
ディヴィジョン	1	1d10	オート	視界	単体	自動		
効果： シナリオレベル回。ダメージ算出直後に宣言。対象のダメージを端数切り捨ての半分にする。減らしただけ自分のHPを失う。								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

罪過：怠惰
両親の多忙により徐々に生活サイクルがずれていき、孤独になる。手伝いや家庭の細々とした雑務、当番は嫌がらずにする少女だったが、反面自分自身の身の回りの生活を維持するのがひどく面倒になっていく。怠惰は自身の生命維持活動に及びはじめ、その第一として彼女は食事をしなくなった。充分な金額のお金は置かれていたし、自炊を強いられているわけではなかったが食事をとるということ自体が億劫になっていく。
自分でつくった料理はおいしくない。一人でたべる食事はおいしくない。お母さんのつくってくれるあたたかいごはんがたべたい。
心理的な影響は味覚にも及んだ。いつだったか母が置いていった菓子パンをかじった。土をたべているみたい。
弁当をつくるのが面倒だったのでカロリーメイトを買った。ゴムを噛んでいるみたい。
彼女の怠惰は一度自身を殺しかけた。
その後彼女は両親にあらぬ噂がたっているのを知る。
「ろくにごはんもあげていないらしいわよ」
「だから小宵ちゃん、あんなに痩せちゃって…」
「こういうのもネグレクトっていうのに入るのかしら」
ああ、これは この怠惰は こんな怠惰すら いけないことなのだ。
自分の怠惰は両親を巻き込む罪悪だと知った。
(おとうさんはわるくない。お仕事をがんばっているだけ)
(おかあさんもわるくない。いつもちゃんとごはん代を置いてくれるのに、食べないわたしがわるいの)
彼女が病院に担ぎ込まれことのはそれ以来一度としてない。
しかし彼女の拒食は、いまだに治っていない

たべられるものがあることも知っている。顔の見える相手が、自分のために与えてくれたものだけは彼女の舌は味覚を取り戻す。
「顔色わるいよ？小宵。ダイエットも大概にしときなよ？ほら、鉄分クッキー」
「やった。ラッキー。…えへへ、ありがとう」